掛川三城ツアー 掛川城編 資料１　　令和５年５月 20 日(土)

１ 掛川城の戦いと城砦群

徳川家康による掛川城攻めとは、遠江の覇権掌握とともに名門今川氏の滅亡という東海の戦国期においては画期となった戦いです。

三河の松平元康（徳川家康）は、永禄３年（1560）桶狭間で今川義元が倒されると、今川方から独立を図り尾張の織田信長と同盟を結びました。家康は、今川領の東三河・西遠江への侵攻を開始します。その侵攻に誘発されるように東三河・西遠江では、それまで今川氏に与していた国衆の今川氏からの離反が相次ぎ、混乱状況に陥ります。同じ頃、武田信玄も今川領の駿河に進出、家康と信玄は今川領の分割の密約をしたとされ、家康は曳馬城（浜松）に入ると高天神城の小笠原氏興・氏助父子、久野城の久野宗能らの東遠江諸侯の懐柔を進めます。駿河に侵攻した信玄は、駿府から今川氏真を追い払い掛川城に追いやりました。永禄 11 年(1568)家康は、氏真の籠もる掛川城に攻撃を開始します。家康の掛川城攻めは、掛川城奪取までに半年余りを要し、その間にいくつもの徳川方の陣城が築かれました。

掛川城攻めの際に築かれた陣城としては、『武徳編年集成』等によれば、相谷砦・長谷砦・曾我山砦・天王山砦・金丸山砦・青田山砦・笠町砦などが知られます。しかし、その多くは開発等により消滅しています。現在、その地形から陣城として認識できるものは、笠町砦・天王山砦・青田山砦です。

15 世紀末

今川義忠の命で、朝比奈康熙が掛川古城を築く

永正９年(1512)

泰熙の嫡男泰能が掛川城（現在の位置）を築く

永禄３年(1560)

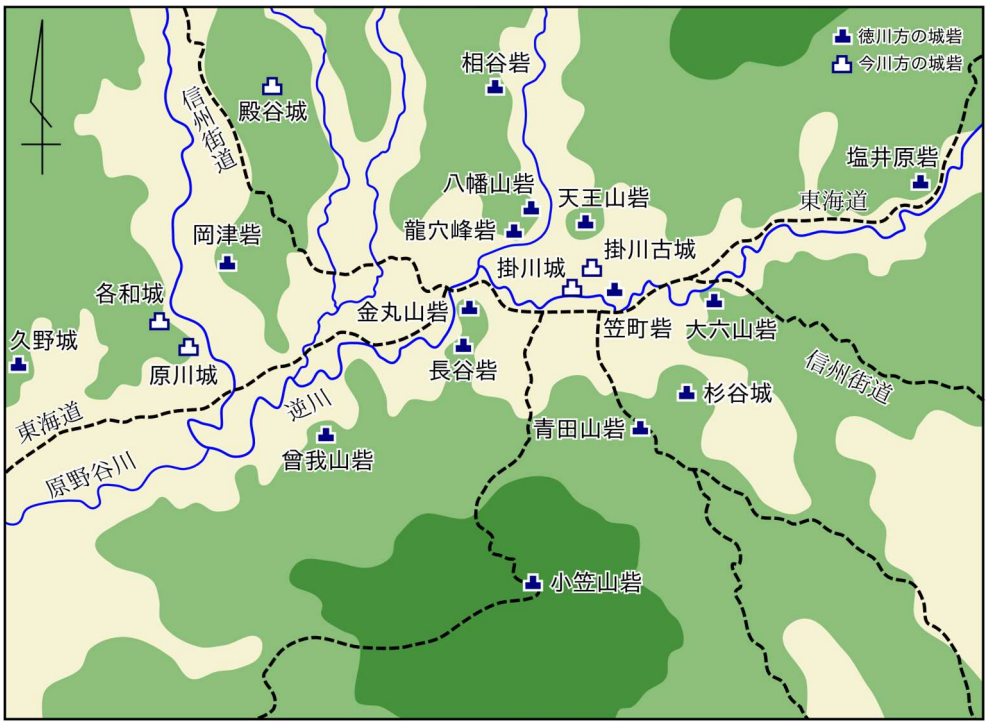
桶狭間の戦、織田信長に今川義元討たれる → 徳川家康、今川氏から独立

永禄 11 年(1568)

今川氏真が掛川城に逃げ込んだ掛川城を徳川家康が包囲

永禄 12 年(1569)

掛川城開城、家康の重臣石川家成が城代として入城



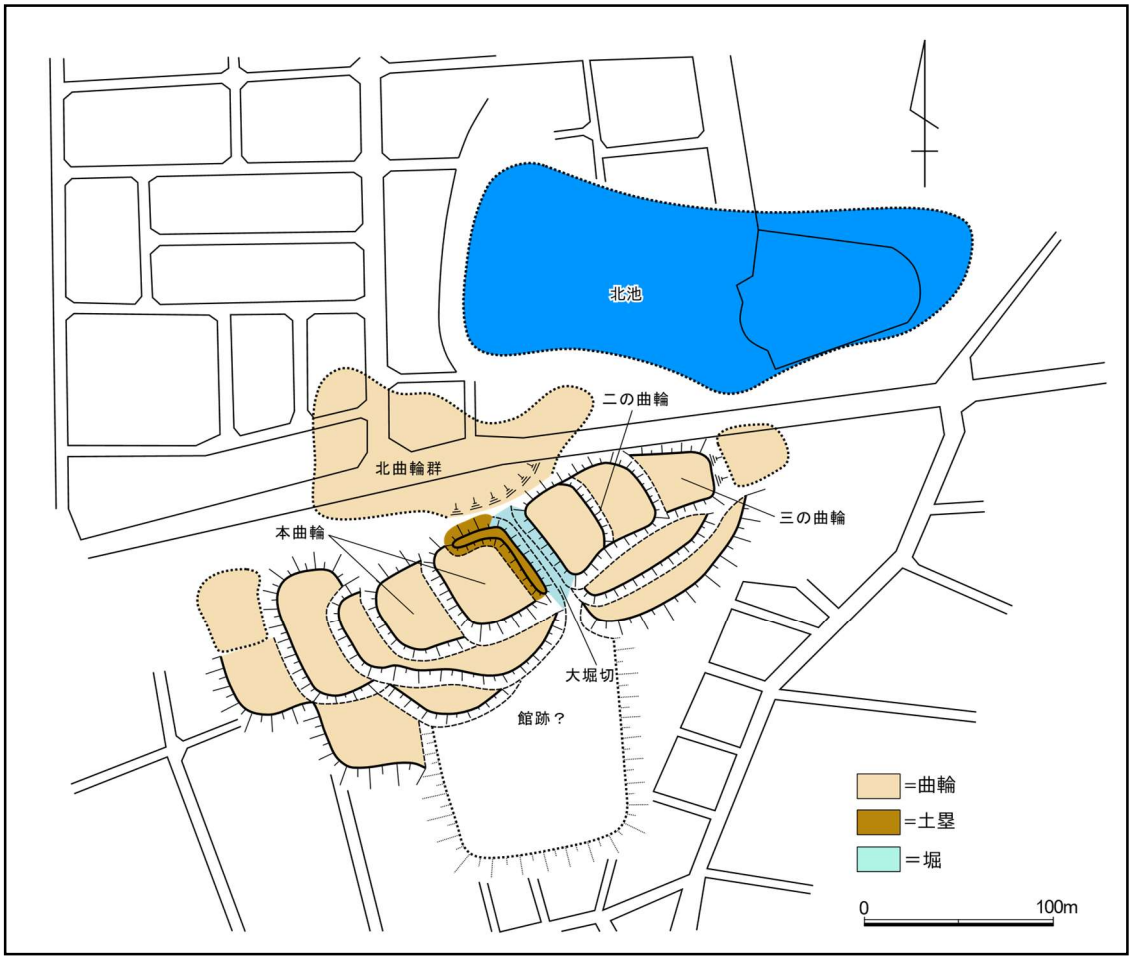
１図　掛川城攻め城砦群配置図

２ 掛川古城

戦国時代、海道一の弓取りとしてその名を馳せた駿河の戦国大名今川氏が、西に位置する遠江支配を進めるため、東遠江の拠点として築いたのが掛川城です。今川氏の重臣朝比奈康熙は、15 世紀末、現在の掛川城から北東 500m程の独立丘陵に最初の掛川城（掛川古城）を築いた。朝比奈氏は掛川古城を拠点に東遠江の攻略を進め、今川氏の遠江支配を盤石なものとしていきます。

掛川古城は、市街地中にありながら中世城郭の様相をよく残しています。曲輪配置としては、本曲輪を中心に西に二の曲輪・三の曲輪が配され、さらに腰曲輪が取り付く。北側にも曲輪が存在しましたが、国道の貫通、消防署建設により消滅してしまいました。また、現在の小学校のグラウンド部分に居館（城主等の住まい）が存在したと考えらます。

本曲輪には明暦２年(1656)に建立された徳川三代将軍家光の霊牌を祀る龍華院大猷院霊屋があり、曲輪の東側には土塁が残されています。本曲輪と二の曲輪を分断する大堀切は、幅約 10m、現況での深さ約７ｍを測り圧巻の規模を誇ります。発掘調査では最深部約９ｍ、堀北端には土橋が取り付くことが判明しました。新城築城後も城郭として使われ、実際に永禄 11 年(1568)の徳川家康による掛川城攻めの際には朝比奈方の出城として使われました。徳川領有以降は対武田との前線に位置する城郭として、大堀切の拡張などが拡張されたと考えられます。



２図　掛川古城縄張図

３ 笠町砦

逆川南岸、北から南に張り出した低丘陵上に占地しています。標高 43m、比高 12mを測り、掛川城の東 900m程の地点に位置し、頂部の西に立てば掛川城を望めます。周囲は住宅地と化していますが、神明宮を頂く境内は鎮守の杜となっており開発を免れています。境内を北から南へ往来する階段の参道が取り付きます。

独立丘陵状の頂部付近を曲輪とし、南西と南東に延びた尾根上に帯曲輪状の削平地を設けています。

頂部の神明宮社殿が建つ平坦地が曲輪跡と考えられ、南北 90m、東西 50m程を測ります。曲輪周辺は、社殿造営の改変により平坦地となっており遺構は見られません。社殿北側は１m程低くなっており、一部に土塁状の高まりが認められます。

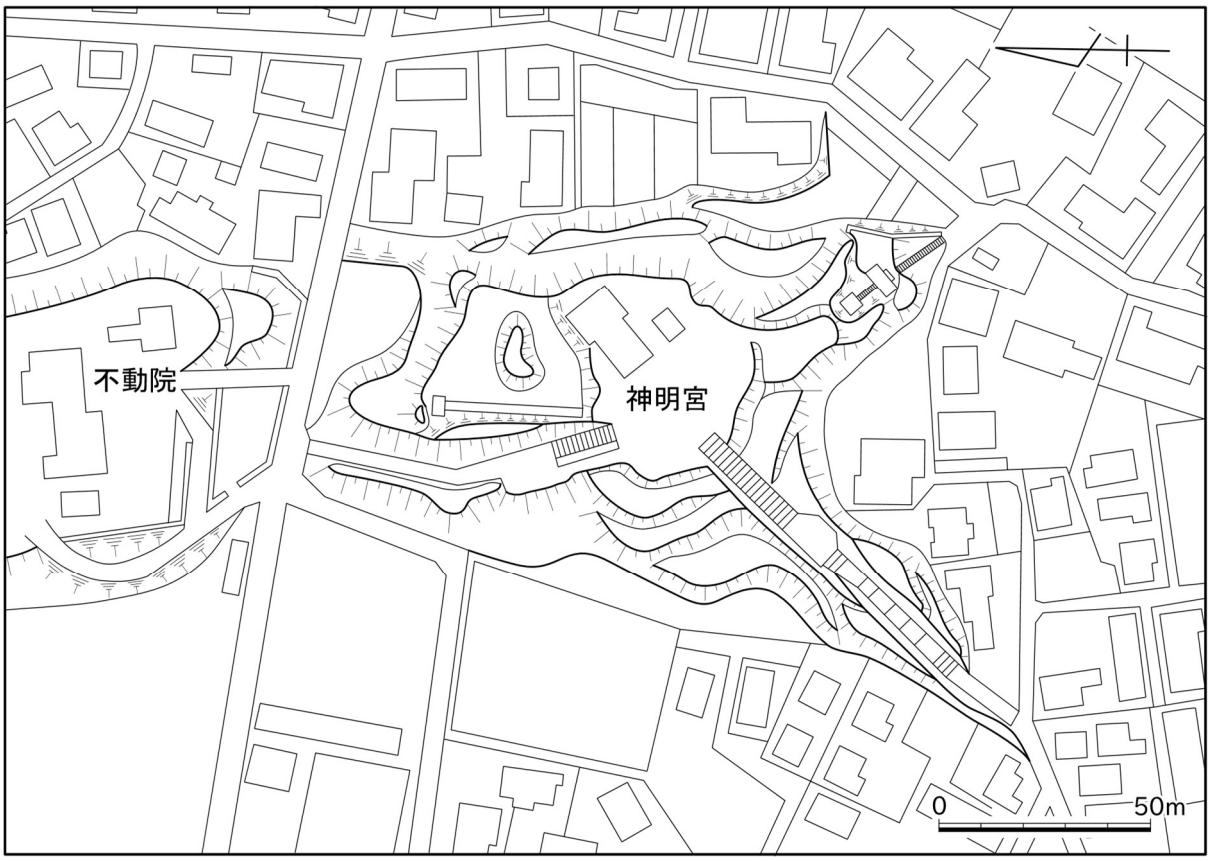
南西に延びた尾根は階段の参道により改変されていますが、その両脇、特に西側には狭小ではありますが、３段程の腰曲輪状の平坦地が見られます。西方からの攻撃、すなわち掛川城からの攻撃を想定しての普請と考えられます。東尾根は八幡宮により改変されていますが、小規模な腰曲輪状の平坦地が見られます。

西斜面は切岸となっており、中腹に腰曲輪状の平坦地が設けられています。北斜面も切岸となっており、防御性が高められています。

現在ある北と南の階段の参道に虎口（城の出入口）を求めたいのですが、改変のため積極的には首肯できません。他に虎口らしき痕跡を認めることができないため、参道部に何らかの虎口が存在した可能性は高いと思われます。

以上のように、狭小な帯曲輪状の平坦地と切岸以外に遺構と呼べるものは見あたらないのですが、掛川城方面を中心とした西方への監視はもちろんのこと、独立丘陵として四方に眺望が利くことから陣城としての基本機能は兼ね備えていたと考えてもいいでしょう。

北側には、道路を隔て不動院が鎮座する笠町砦と同じ高さの丘陵があります。丘陵上は不動院境内として削平され遺構は見られないのですが、周囲は切岸状をなしており陣城としての地形的環境を兼ね備えていたことがわかります。



３図　笠町砦縄張図

４ 掛川城本丸虎口

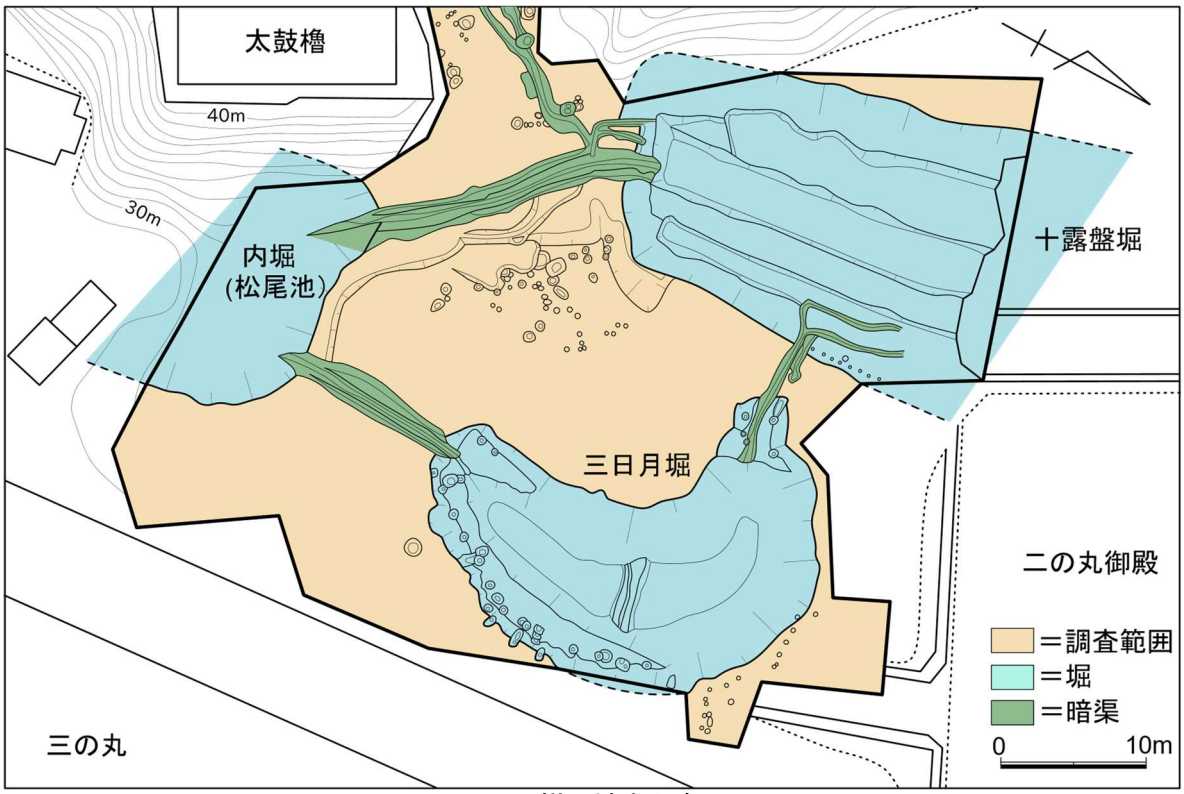
徳川氏が掛川城を領有していた戦国時代の 20 余年間、掛川城は徳川氏の手により改修されていたと考えられます。とりわけ、武田氏との抗争が続いていた領有直後は、対武田氏の最前線に位置する城郭として改修された可能性が極めて高いはずです。残念ながら、それを示す文献史料は存在しません。

徳川氏による掛川城改修の痕跡は、発掘調査により確認されました。家康の痕跡もしくは影響下にあった具体的な箇所とは、掛川城主要部の出入り口にあたる本丸虎口（三日月堀・十露盤堀・内堀[松尾池]で囲まれた空間）で、現在でもその威容を目にすることができます。

３つの堀に囲郭された虎口は、馬出空間を備えた枡形虎口とも見え、非常に技巧的な虎口であると評価されています。この技巧的な虎口が造られた時期について、発掘調査の結果、今川氏配下の朝比奈泰能の創築よりも後であり、かつ山内一豊が入城するよりも前であることが判明しています。すなわち本丸虎口の構築は、徳川家康によるものと言えます。また、遠江においてこのような大規模かつ技巧的な虎口は、16 世紀後半以降にならないと出現（採用）しないとされています。実例をあげると、掛川城の本丸虎口と同様、大規模な三日月堀と横堀を駆使した諏訪原城（島田市）の馬出虎口は、これまで武田氏によるものとされてきましたが、発掘調査と近年の研究によれば、武田氏が構築したものを天正６年(1578)以降徳川氏が拡張により大改修したものであることが判明しています。

このように発掘調査結果と周辺の城郭の様相を勘案すると、掛川城本丸虎口は三日月堀・十露盤堀・内堀(松尾池)と馬出状の空間を兼ね備えた大規模かつ技巧的な虎口として、徳川家康により天正年間のはじめ頃(1576～80)に構築されたものと結論付けることができます。

掛川城において、『正保城絵図』に代表されるような外堀により城下を包括した、惣構えとしての縄張が近世掛川城の端緒となったものであるとの見解には異論はないでしょう。これまで山内一豊以前の様相は不明な点も多く、そのため徳川氏以前の掛川城についてはどちらかと言えば過小評価されがちなきらいがありました。前述のように、本丸虎口の出桝形とも呼べる技巧的な虎口の原型は、徳川家康の時代（天正年間のはじめ頃）の遺構であり、徳川氏の普請がことのほか大規模なものであったとことがわかります。



４図　掛川城本丸虎口